

感動の神ありて書く



酒井憲一
(評論家)

ベトナムのことわざに、「衣服を多く着るとあたたかい。人が多いとうれしい」というのがある。最近ベトナム旅行をした機会にこれを知った。都会好きの私は自然の寂寥せきりょうよりもにぎわいが好きで、しかも生来感動屋なので、日に幾度となく感動して、それにひたる。趣味は都市観察とへばな詩作で、人間的な風景と言葉に生きがいを感じている。

感動には静的と動的がある。このベトナムのことわざに、文章を書けば書くほど楽しいという比喩ひゆを自分流に感じて、動的感動を覚える。相田みつをの言葉に「感動とは感じて動くと言ったなあ」というのがある。平凡に書いて非凡である。常識を書いて常識的に受け取らせないことが文章力である。感動は文章の基盤であり、ひいては人生の神である。

外国語苦手の反作用も手伝って、私は「母国語を駆使することが、生活や学問の大本である」と信じ、日本語主体のアメニティ研究をライフワークにしている。文章表現法の教壇に立ち、『文章の書き方』(丸善)を出したのもその一環である。

七十一歳になった六年前、青年時代の夢だった海外留学が突然実現した。キューバ旅行の往路、メキシコシティで知り合った婦人の案内で夜間小学校を見学し、少年からおばあさんまでが机を並べている光景に感動した。それを熱心に婦人に伝えたところ、自邸にホームステイして通学をと勧められ、帰国後、

「バカヤロウ」

この言葉の衝撃は、それまでの人生で最も強烈だった。メキシコの記は、余勢を駆って『ああメキシコ夜間小学校——おじいちゃん一年生留学』(アメニティライフ)という本にすることができた。

さらに後日談がある。夜間小学校にインディヘナの母親生徒がいた。私はそのベビーをあやして勉強したりしながら、従来温めていた赤ちゃん学校の設立を決断し、帰国後の二〇〇一年に「赤ちゃんを抱っこしよう」と「赤ちゃんを書こう」の赤ちゃん文学運動を掲げ、ネット主体の赤ちゃん学校を開校した。

赤ちゃん文学運動は、毎週校長室で制作・無料配信する『週刊ベビーメールマガジン』とホームページを媒体として、「三行赤ちゃんうた」を主力に童話、絵本、エッセイなどをつくり合っている。一周年記念に「赤ちゃんへの恋文」を公募した結果、作品が『赤ちゃんへの恋文』(チクマ秀版社)として出版された。

赤ちゃん抱っこについては、小学校での赤ちゃん授業を提唱した。今では江戸川区立の複数校で総合学習として行われ、赤ちゃんとのふれあいと感想文を通じて教育効果を高めている。

感動は、話をこれで終わらせてくれない。一転してアメニティ研究の拠点で知られる東京大学工学部都市工学科に国内留学できたことだった。二〇〇四年春に聴講生入学した。西村幸夫大学院教授の学部四年生対象の「都市保全計画」と大学院の「都市設計特論」の情熱的講義を受講したが、毎回感動に突き動かされ、教授の言葉の端々までノートに書きなぐった。そして、このノートを起こし、学生のサブテキスト向きに年内迅速出版した。『教え子のノートが記した西村幸夫「都市保全計画」&東大研究室ホームページ熟年聴講生日誌』(アメニティライフ)

一年間の在学特別許可を得て、一年生の仲間入りをした。初めてのスペイン語は、NHK講座を五か月視聴して飛び出した。授業中も西和辞典と和西辞典をひっきりなしに引かなくては追いつかず、辞書の角がピラミッドのようにめくれ上がった。会話落第の埋め合わせに、毎日詩を書いて女教師に提出した。こぼれるように日本語で詩ができるのはいいが、訳すのが大変。しかし、辞書の例文をもじったりして姑息こそに乗り切った。授業料は義務教育で無償なため、お礼に校長の希望を聞き、簿本をかつぎ、裸電球パックを手に初登校して寄贈した。

次の詩は、メキシコがカトリック国だった雰囲気を感じて、いさか啓示めいた発想になったが、スペイン語に訳してその教師に提出した。それを機縁に意思の疎通が急進展した。海外では物珍しさから、ひんばんに感動する。このときも箒と電球とおのれが異様な登校姿にびんぴんと感じたのだった。

電球は希望の光／箒は地上の浄化
天に電球あり／地に箒あり

一方、外国人ばかりの小学校に入っても、語学音痴の私はなかなか語学が身につかず、クエルナバカに一時滞在して語学校に通った。マンツーマン授業だった。最後の日、若い女教師に「日本語で知っているものは？」と質問したところ、すかさずいわれて仰天した。

フ)という一六〇頁のブックレットである。

「都市保全計画」というのは、終講直後に刊行された一〇〇〇頁を超す教授の名著『都市保全計画』(東京大学出版会)のことである。聴講生日誌というのは、私が授業中にひらめいたことについて、帰り際に学内の図書館に走って関連文献をあさり、徹夜まがいに小論という意味のエッセイに書き上げては次の授業時に自主提出したものである。教授の発案で「熟年聴講生日誌」として、都市デザイン研究室のホームページで公開された。思えば、そのエッセイを校正しながら、授業に遅れまいとして赤門から校舎まで何度疾走したことか。

こうして夢中で受講できたうえに出版までできたのは、感動の神の導きである。教える側の一方的講義記録ではなく、受講した教え子を濾過ろかして再現した記録という意味で、受け取られる側の認識を代表していることになり、貴重だと思ふ。この発想は、作家駒田信二の朝日カルチャーセンターにおける「小説作法と鑑賞」講座を受講した主婦が、講師を尊敬して丹念にこつたノートを起こしてまとめた『駒田信二の小説教室』(野島千恵子、文藝春秋、一九八一年)の感銘が、肩を押してくれたものである。

最後は、良寛関係著作で活躍著しい友人の松本市壽氏いらいじゆから届いたアドバイスで結びたい。

「文は人なり。しかし、人は文なりとはいかない。そこには文章を構成する技術的な習慣が必要だ。文を書いて人の心を感動させるコミュニケーションの原点、それが文章の原点だ。感動を呼び起こすものは、文章を書く人の情熱以外のなものでもない。そして、案ずる必要はない。あなたが実際によく知っている人物が、もう机の前にイメージされて座っているのではない。そうだ、その人に語りかけるつもりで書き始めればよい」